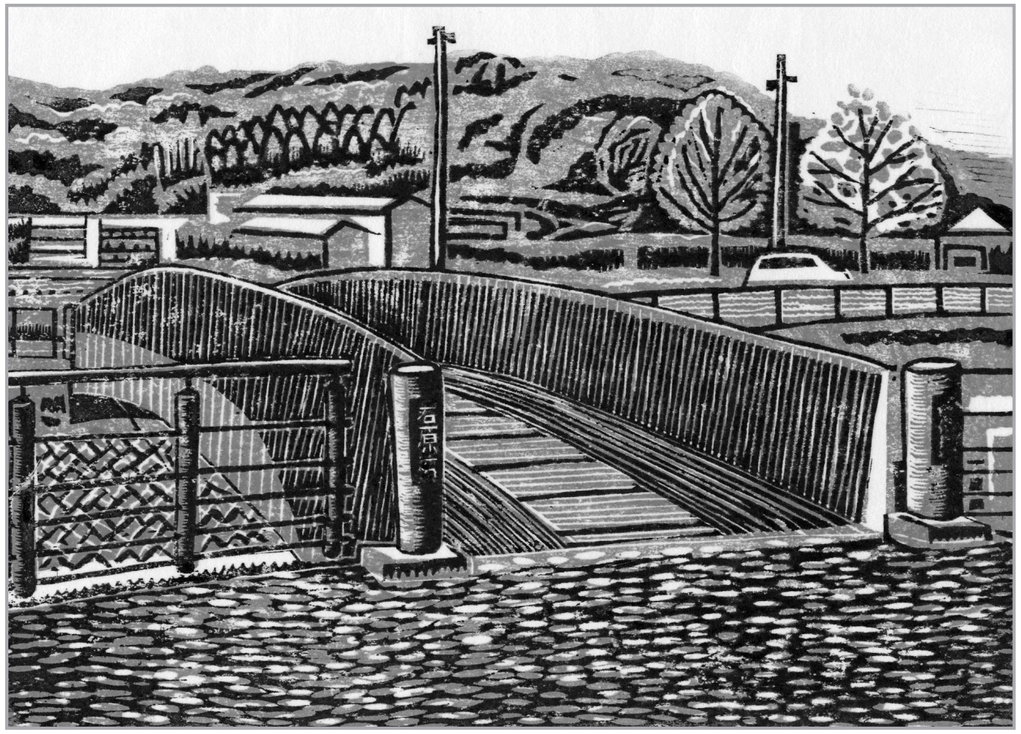
いたちかわらばん

通刊３４号　鼬川・独川 / 川原番・瓦版　06 夏号



【版画　宗森英夫】　【石原橋】

石原橋の由来について

新しくで出来た尾月橋上流の上郷市民の森に連なる歩道橋の橋名が、地域の人達によって命名され「いしはらはし（石原橋）」に決まりました。

〝石原〟…人の名字のようだし…。　近くに同じ名前の園芸店がある…。

土地の人に尋ねてみると、

〝栄区の町名は全て昔の地名を復活させて町の由緒ある歴史を後世に残すようにしているんだよ〟

〝石原〟の名も、昔この辺一帯が〝石原耕地〟と呼ばれていたことによります。瀬上池から流れでるいたち川右支川（昔は上川と呼ばれていた）が、現在の神奈川中央交通の車庫裏あたりから、増水の度にいたち川本流（下川と呼ばれていた）に流れ込んでいました。この段差は６ｍ位あり、上川の堤防は人工的に造られていて、洪水よってたびたび押し切られたことから、山手学院に行く橋を「押切橋」と云い、その川と川の間を〝石原〟と呼んでいました。

この地域からは砂利が出土しないのにどうして〝石原〟の名が付いたのか…。

私の推測では、この地域から〝かなくそ〟（鉄滓）の出土や溶鉱炉の発掘により、その上流部に昔、製鉄所（たたら）があった事が判明しています。その鉄滓の一部が上川から流れ落ちその堆積した物は、石では無く鉄の塊だったのかもしれません。

栄区で製鉄が行われていた事により〝鍛冶ヶ谷〟の町名が残っているように、町名から歴史を調べていくと昔の人々の生活や社会を垣間見る事が出来るのではないでしょうか。

水人子（ミジンコ）

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です

◆ いたち川整備 前線考 ◆

横浜でも比較的自然環境に恵まれた栄区のなかでいたち川の存在は大きい。都市周辺の河川の多くが直線的にショートカットされ、自然の流路を失っているのに比べると、いたち川の中流域では未だ蛇行らしき流れが保たれ、少なくともショートカットむき出しでないのがうれしい。

プロムナードの整備が進むと共に、扇橋の水辺、稲荷森の水辺、坊中の水辺に続き、上郷市民の森の麓の整備が進んで、川をまたぐ「いしはらはし」が４月に開通した。紅葉橋から尾月橋までの左岸は、一部を残してほぼ整備も終えたようだ。また新しい水辺ができた。この地域は森の裾野を巻くように川が蛇行して、東西に流れていたいたち川が南北に流路を変え、緩やかなＳ字カーブを描き上流に向かいながら川幅も徐々に狭くなる。川が中流域から上流域に入ったことを感じさせる自然の景観である。

上郷市民の森と４～５ｍに達するアズマネ笹によってフタをされたように保護されていた川は、かつてはカワセミやサギの格好の居場所だったが、笹を刈り川幅を広げ、遊歩道が造られて、明るく人の行き交う今の水辺には、かつてのように野鳥の姿は見ることができなくなった。わずか２～３年の間の出来事だ。環境整備という人間の居場所づくりは一方で野鳥との共生を望みながらも、結果として野鳥との共生を拒否してしまったようだ。

いたち川は「ふるさとの川整備事業」として、国・県・市が一体となって進めている河川整備事業である。事業理念として、「低水路による河川植生の復元」、「水際部の自然復元と植生工法」、「リバーウォークの整備」の３点を柱に整備が進められている。リバーウォークの整備では「川の流れに触れることのできる親水性豊かな水辺づくりや散策の楽しさを実感できるプロムナード整備など、いたち川が庭になるような街づくりを行う」と定められている。当初は 1988 年に「ふるさとの川モデル事業」として始まったが、「せせらぎふれあいモデル事業」などの３事業を統合して 1996 年に「ふるさとの川整備事業」と名称を変更して再スタートした。

いたち川は、今後も二級河川に指定されている神戸橋までの整備が進められることと思われるが、さて、今後の整備が進むなかでいたち川は、どんな川に変身するのだろうか。　（谷　渓）

〝きみもファーブルになれるか〟

いたち川 OTASUKE 隊イベント部は、夏の行事として、本郷地区センターが行う環境保全活動を全面的に支援する事としました。“きみもファーブルになれるか！” をキャッチコピーとして参加者を募集しています。参加ご希望の方は、本郷地区センターへお申込み下さい。（電話　８９２－５３１０）

目　的：いたち川の環境保全を子供たちにわかって貰うために、いたち川の川辺に生息する生物や植物を採取して、実際に手に触れて、いたち川の自然のすばらしさを体験しようとするものです。

主　催：本郷地区センター　　**後　援：**いたち川 OTASUKE 隊

日　時：平成１８年７月２２日（土）　９時～ 14 時　　**集合場所：**本郷地区センター会議室

いきもの発見隊員：小学生３年生以上　２０名（保護者の参加歓迎）　　**参加費：**２００円（保険・資料代）

活動企画：陸上活動と水中活動を各１時間程度の活動時間とする。始めの１時間は陸上活動として全員で植物採集、昆虫採集を行い、水中活動の魚捕りは最後に行う。

植物採集：一人５枚程度の用紙とセロテープを用意して、植物の名前や採取場所を調べ用紙に記入、持ち帰り押し葉にする。

昆虫採集：採取かご（参加者が用意）に入れて名前を調べ写真等で記録を残し、採取した昆虫は逃がす。

水中活動：魚捕り…魚アミの使い方を教え、バケツなどに捕獲した魚を入れて名前を調べる。

:水棲昆虫採取…捕り方を教え、虫眼鏡を用意して採集した昆虫の名前を調べる。採取した魚や昆虫は全て逃がす。

水人子（ミジンコ）

発行年月 2006年6月
通刊34号

発行：独川ＯＴＡＳＵＫＥ隊（いたちがわおたすけたい）
ＯＴＡＳＵＫＥ隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係　〒247 - 0005　横浜市栄区桂町 303 -19
TEL 045 - 894 - 8161　FAX 045 - 895 -2260
栄土木事務所下水道・公園係　〒247 - 0007　横浜市栄区小菅ヶ谷 1- 6 -1
TEL 045 - 895 - 14 11　FAX 045 - 895 -1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）

【いたち川水源探査 - 1】

洗井沢川・矢沢堀の源流を訪ねる

今回は３２号で紹介した［いたち川の水源］のうち、⑥左岸に流れ込む“洗井沢川”と⑦稲荷橋左岸に流れ込む“矢沢堀”について報告します。

夏号に冬の報告となりましたが、水源探査は「樹木や雑草の繁茂していない時期の方がわかりやすい」ということで実施されたものです。

2006年１月２８日（土）午前１０時に栄区役所に集合したOTASUKE隊員７人は、天神橋脇でいたち川本川に流入する洗井沢川（左支川）の源流探査に向け出発しました。

天神橋から栄図書館裏を起点とする洗井沢川せせらぎ緑道までは暗渠化されています。せせらぎ緑道の途中には古い消防小屋跡があり、今では珍しい半鐘が残っています。半鐘の手前の細い道を左にちょっと登ると「アラハバキの祠」があります。このせせらぎ緑道の上流側には、公田小学校下の崖よりの湧水が流れ込んでいます。崖からは随所に水の浸み出しを観察できました。せせらぎ緑道を過ぎると、水路は再び公田小下まで暗渠化されています。

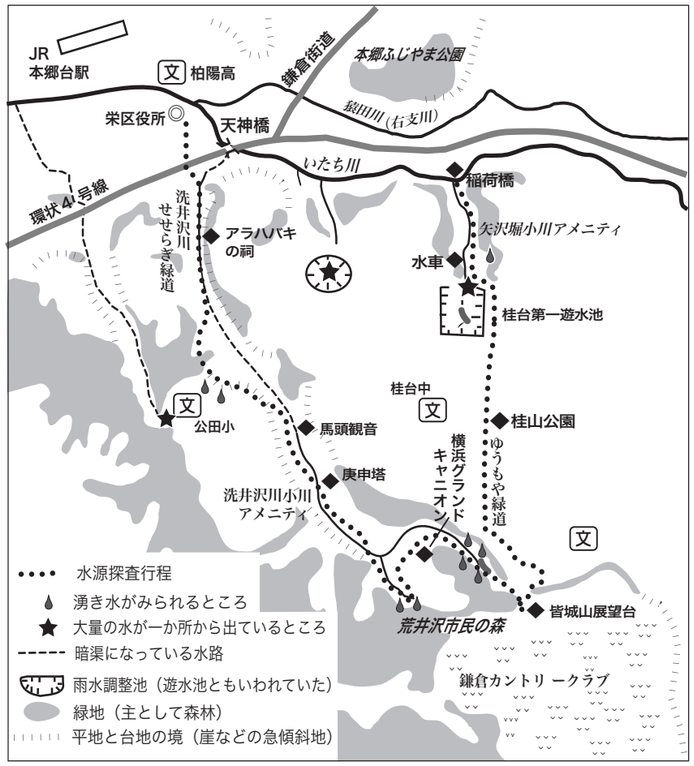
桂台への道を左にみて通過すると、左側に馬頭観音４体が石の小屋に祭られています。ここから再び水路が顔を出し荒井沢市民の森まで続いています。馬頭観音が祭られているあたりは横浜環状南線の予定地で、地下の高速道路が通されるところです。水の流れが横浜環状南線の道路工事により分断され、行き場を失うことがないようにと祈りながら、流れに沿って上流へと歩いていくと、左手崖の岩のくぼみに庚申塔が５つ祭られています。やがて左手に「横浜グランドキャニオン」といわれる断崖が見えてきました。ここから洗井沢小川アメニティが市民の森入口まで続いています。このあたりは上洗井沢水辺愛護会のたゆまざる活動によって６月頃にはホタルがたくさん見られるようになりました。川の中にはホタルの餌となるカワニナがたくさん見受けられました。荒井沢市民の森のごくらく広場で、洗井沢水辺愛護会員でOTASUKE隊員でもあるＫさん夫妻を加え９人で谷戸の水源探査へと向かいました。

先ず南側（鎌倉側）の水源を探査すべく１月２１日の大雪の残雪を分け入って南側へと進むと、崖には水の浸み出しと共に５０ｃｍ以上の大きなツララが３０～４０本見られ、皆大感激でカメラに収めました。（写真参照→）

さらに雪道を進み鎌倉側との分水嶺から崖をとおして流れてくる水源を確認してカメラに収めました。次に北側の水源を求めてごくらく広場からカエル池を通り山の中を進んで行くと、市民の森側の崖にも幾つもの水の浸み出しとツララを見ることができました。それから皆城山展望台に続くとみられる崖からの水路を確認しました。谷戸田の池を過ぎ、桂台側の崖下側に行くと、崖からはきれいな水が浸み出し流れをつくっており、雪水のなかには芹がたくさん生えていました（心ない人が根こそぎ持っていく事があるとか。根は残しておかないと根絶やしになってしまうのにとＫ隊員が嘆いておられました）。桂台側の崖の上はすぐ住宅地で、木々の間から家の屋根が見える近さなのに、きれいな水が大量に浸み出し、流れをつくっているのには驚きました。さらに山道を進み３段に作られた“ため池跡”に辿り着き、その一番上の池跡部の水源を確認しました。雪を割って流れをつくっている水源はとてもきれいでした。

次に矢沢堀コースに向うべく“皆城山”山頂より鎌倉カントリー脇を通って桂台南２丁目への階段を降り、桂台団地を縦断する“ゆうもや緑道”を散策し、途中“桂山公園”の小高い山の途中に祭られているちょっと変わった“機織地蔵”をみて、緑道を“桂台第一遊水池”まで行きました。ここから階段を降りた所が稲荷橋で、いたち川に合流している“矢沢堀小川アメニティ”の起点です。水源は遊水池の水をサイホンの原理を応用してトンボ池の上に流入させたものです。このあたりの水は鉄分が多く幾分赤茶けてみえます。水路には野生のクレソンが沢山みられました。噛んでみるとぴりっとした辛味がありました。

ちょっと下ると水車がみえます。本誌３２号で紹介したアルミ製の水車です。１日も休むことなく稼動して水を攪拌して水中に酸素を供給しています。水車の下流側では生物の種類・量とも多いそうです。水路に沿ってきれいに整備された遊歩道を下っていくとやがて稲荷橋での合流地点です。ここには、同じく３２号で紹介したコーン型の魚道が設けられています。ここで今回の水源探査を終えました。



今回の水源探査で思いを深くしたことは、たとえ山が切り崩され、谷が埋め立てられて宅地化されても、その土地に降った雨は地面に浸み込み、昔ながらに地下水脈を流れ続けているのだと思いました。豊かな水に奢ることなく、水の流れを大切に残していきたいものです。

（ＹＦ記）

リレートーク 30

上郷地区センター

栄区では「豊田地区」「本郷地区」に次ぐ三つ目、横浜市としては八十番目に当る「上郷地区センター」が5月にオープンした。場所は、神奈中のバス停で「中島」または「西ケ谷」で下車して、徒歩5分のところである。環状4号線から少し下って、前面と背面をいたち川の流れが囲んだ、離れ座敷のような敷地に、周囲の自然によく調和した、鉄筋コンクリート造2階建てのモダーンな建物が建っている。

建物の正面から眺めて見ると背景に樹木の緑とその遥か奥に送電鉄塔が2基見える。左手にある大きな木の梢では沢山の鳥たちがさえずり交わしていた。川の下流側、直近には「港南台コートハウス」の高層マンションが建ち並んでいる。一方、川のこちら側には農村地帯であった上郷地区の名残かビニールハウスが並んだ畑も見える。

センター前面の川は、堰き止められていて僅かな水流しかない。よく観察すると、わざわざそうしているらしくて、少ない分流水と曲がりくねって掘られた岩盤が組み合わされており、流れに沿って白い花をつけたクレソンが豊かに茂っている。ひょっとしたらホタルの餌になるカワニナを育てようとしているのかしら、と思いながら橋の名前を見たら何と「ほたる橋」と書かれているではないか。きっとここを「ホタルの宿」にするつもりなのだろう。それにしても六十余り架かっているいたち川の橋の中でも一番心に優しい響きを与える名前ではないだろうか。

館内は出来立てだから床・壁・ガラス扉など全てがピカピカだ。そして受付の館員がこぼれんばかりの笑顔で迎えて下さった。体育室・音楽室・会議室など様々な設備が整えられているが、細かい紹介は省略する。

図書室の棚はがら空きで本はまだ少ないが逐次充足してゆくことであろう。しかし、お金で買える本の数を増やすことが大切でない　とは言わないが、ホタルを見たり養ったりすることで自然の営みや自然の恵みに思いを寄せて、お金では購えないもっと大事なものがある、ことを学ぶ方がより大切なのかもしれないなあーと思いながら上郷地区センターを後にした。

（ピンテール）

いたち川で見られる植物 9

花の形がおもしろいツリフネソウ

全国に分布しており特に珍しい花という訳ではないが、いたち川では源流域のごく限られた場所でしか見ることができない。山麓や水辺に生える一年草で草丈は五〇センチ位になる。花期は八～十月で、長さ三・五～四センチの紅紫色の花をつける。

「釣船草」という名は、花の形が帆掛け舟を吊り下げたように見えることからつけられた。

（いもり）